The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近畿の薩摩金襴手制作に関する一考察 ： 神戸薩摩を中心に
Author(s)	松原, 史
Citation	デザイン理論. 2018, 71, p. 26-27
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67716
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

近畿の薩摩金襴手制作に関する一考察
── 神戸薩摩を中心に ──

松原　史／京都精華大学非常勤講師・清水三年坂美術館特別研究員

はじめに

薩摩焼は，もともと薩摩藩（現鹿児島県）で作られる焼物のことをさすが，明治に輸出用に各地で制作された薩摩金襴手は，現在それぞれの制作地の名称をとって，京薩摩，神戸薩摩，大阪薩摩，横浜薩摩などとよばれている。それらの陶磁器は，当時盛んに輸出され，西洋諸国でSATSUMAと呼ばれて人気を博したが，その制作の実態に関しては今なお，多くのなぞが残されている。本発表では，その中でも特に，「司山」「精巧山」など，近畿地方の流通の要所であった神戸で制作された神戸薩摩の制作の実態に関して考察を試みる。

輸出薩摩

幕末の1867年に開催されたパリ万国博覧会には，江戸幕府の他，薩摩藩，佐賀藩が独自に参加していた。その際，薩摩藩から出品された金襴手の薩摩焼が好評を得たことに刺激され，薩摩地方以外でも薩摩金襴手様式の陶器の制作が試みられるようになる。

近畿において先陣を切ったのは，京焼の窯元であった６代錦光山で，明治３年頃，薩摩金襴手風の絵付を試みた。明治５年頃には，錦光山，そして８代帯山らがそうした陶器を神戸の外国商館に売り込み，本格的な輸出に着手している。その後，評価に上下はあるものの，明治期，そして大正・昭和に至るまで，SATSUMAは西洋において，比較的手に入れやすい贅沢品として，流通し続けている。

輸出用に作られた薩摩は，茶碗や花瓶としてはもちろん，ランプシェードや暖炉飾り，テーブルセンターやキャビネットを彩る器としても用いられた。スペインの偉大な建築家，アントニオ・ガウディの設計したグエル邸においても，1900年代初頭，薩摩焼の花瓶に金属製の足と蓋を取り付け，一対の暖炉飾りとして用いている写真が残されている。輸出薩摩は，ジャポニスムの流行をみた西洋においては，インテリアを彩る重要なアイテムであったといえる。

近畿における薩摩制作

輸出薩摩が隆盛をみた当時，薩摩焼制作は全国におよび，本薩摩とよばれた本家薩摩（鹿児島）の他，東京，横浜，金沢，京都，大阪，神戸，長崎などに薩摩焼を制作する窯元がいたことが分かっている。近畿地方には前述のとおり，京都，大阪，神戸という３つの産地があった。

その中で最大の輸出規模を誇ったのは，江戸時代から続く京焼の制作地であった京都の粟田口であった。大阪にも，藪明山という特徴的な銅版絵付などを行う窯元が出て人気を博したが，京都に次いで制作規模が大きかったのは神戸である。神戸は，輸出港があるため京薩摩の窯元の支店なども置かれ，流通の要所としても栄えていた。海外では京薩摩といわれることもある「司山」，「精巧山」は，実は神戸の窯元で，細やかで絢爛豪華な絵付の作品を多く生み出している。

近畿における薩摩焼の素地は，鹿児島や京都の粟田，滋賀の信楽などの土が使われ，本焼に用いられて独特の貫入（小さなヒビ）のもととなる釉薬には，長崎の天草陶石や鹿児島の柞灰（いすばい）などが用いられた。上絵付の釉薬も国産のものの他，イギリスやフランスの西洋釉薬も使われるなど，流通網の

発達なしでは，明治の薩摩焼は発展できなかったともいえる。

神戸薩摩

神戸には，司山，精巧山，介山という窯元の存在が確認できている。港として栄えた神戸は，交通の要所であり居留地貿易にも大変優位な地理的な強みがあった半面，焼物に適した土が産出せず，大きな窯（登り窯）が置き難いという弱みもあった。ただ，明治の薩摩焼制作はその材料を日本全国そして海外にまで求めており，また市場も海外であったという点で，その弱みを補っても余り或る地の利が，神戸にはあったといえるだろう。

新資料にみる「司山」

この度，司山の玄孫にあたる方からの情報提供により，作品しか残っていなかった司山の人となりが多少なりとも見えてきた。

司山は，本名を長江他三郎といい，慶長３年（1867），父：長江順太郎，母：ヨリのもと，石川県金沢市に生まれている。はっきりとした年代は分からないが，明治の中頃に神戸に出て，薩摩焼絵付を行っていたようだ。明治35年に神戸への本籍地変更を願い出ているので，少なくともこの頃には神戸での商いが軌道にのっていたのだろう。明治33年（1900）パリ万博に「薩摩焼絵附品」を出品，明治35年（1902）のセントルイス万博では，受賞人名簿にその名をみることが出来る。工房兼店舗は，神戸の布引に構えられていたようで，その看板には「窯元長江司山 / SHIZAN NAGAYE / MANUFACTURER & DEALER / ART SATSUMA WARE / NO1308 TAKIMICHI NUNOBIKI」の文字がある。またご子孫に伝えられてきたことには，元町にも店があったが，知人にお金を貸してしまったがために，工房や店舗の全てを手放すことになってしまったという。

新資料にみる「精巧山」

残念ながら，生没年，本名等未だ不明であるが，神戸薩摩の中で，おそらく一番多くの作例を残しているのがこの精巧山である。作品に「大日本神戸精巧山造之」などの銘が確認できることから神戸薩摩の制作者であることがわかる。またこの度，「明治二十一年十一月　高瀬君に伝授す／精巧山」と記された『陶器絵具調法記』なる冊子の存在により，金沢出身で，当時京都で輸出工芸品の制作販売に従事していた高瀬好山に，精巧山が釉薬に関して伝授したこと，精巧山が粟田焼，九谷焼，薩摩焼などさまざまな焼物の絵付に精通していたこと，その中でも特に九谷焼の釉薬に大変明るかったことなどが，明らかになった。九谷焼の窯元の家に生まれ，九谷焼の研究者としても多くの功績を残した松本佐太郎によると，「九谷の陶工で他府縣に行つて其法を傳へたものは頗る多く，中にも明治中期以降の名古屋，横濱，神戸の陶畫工の殆んど全部と，京都・今熊野の陶業振興地の陶工の大部分は九谷の陶工か其門派である。」（『九谷陶磁史を中心に』古九谷研究会 1935年）とのことで，釉薬知識ならびに人間関係からも，精巧山のルーツは金沢に求められる可能性が高いといえるだろう。

ま と め

明治期の輸出工芸における，産地間での制作者の往来は，従来も指摘されてはきたが，今回新資料の発掘により，多くの作例を残す神戸薩摩の代表的な制作者２人が，金沢にルーツを持つことが明らかになり，京焼の絵付師や友禅職人のほかにも，金沢の九谷焼の絵付師が近畿の薩摩金襴手制作の発展に大きな役割を果たしてきたことが指摘できた。

附：発表にあたり，司山の玄孫にあたる林様，精巧山関連資料ご所蔵の冨木様，諏訪様，京都女子大学の前崎様には資料提供など多大なるご助力を賜りました。ここに記し，心より御礼申し上げます。